

令和7年度 鳥取大学入学者選抜試験問題

(総合型選抜Ⅰ)

課題論文

(地域学部 地域学科 国際地域文化コース)

(注 意)

1. 問題冊子は、指示があるまで開かないこと。
2. 問題冊子は3ページ、解答用紙は2枚、下書用紙は2枚である。
指示があってから確認し、乱丁、落丁、印刷不鮮明の箇所等がある場合は、ただちに試験監督者に申し出ること。
3. 解答は解答用紙（横書き）に記入すること。
4. 下書、メモ等を試みる場合は、下書用紙を利用してよい。
5. **解答用紙を持ち帰ってはならない**が、問題冊子（及び下書用紙）は必ず持ち帰ること。

次の資料は、キム・チョヨプ、キム・ウォニョン『サイボーグになる——テクノロジーと障害、わたしたちの不完全さについて』の10章からの抜粋である。これを読んで、次の問いに答えなさい。

問1 著者は「他者」と直接会うことの意味をどのように捉えているか、著者の見解を200字以内で説明しなさい。

問2 資料からは高度なテクノロジーを導入して安全をもたらすことへの疑問が読み取れる。筆者が示した差異が生み出す「継ぎ目」について、あなたはどのように考えるか。本文の内容をふまえたうえで、800字以内で述べなさい。

【資料】

わたしが14歳のころ、インターネットもつながらない田舎の村で、電話私書箱という一種の出会い系プラットフォームが流行した。まず所定の番号に電話をかけて自分の私書箱を開設しておく。そして無作為に誰かの私書箱番号に接続して自己紹介や電話番号を吹き込み、それを聞いた私書箱の持ち主が連絡してくるのを待つ、というものだ。このプラットフォームを通して、わたしはほぼ初めて、同年代の異性の友人たちと交流した。もちろん彼女たちにとってわたしは、江陵の中学に通っていて、バスケットボールが好きで、よく自転車に乗り、勉強もできる男の子だった（実際には、一日じゅう部屋にこもって漫画『SLAM DUNK』を読み、一人で腕立て伏せをし、床をごろごろ転がり、16ビットゲームを毎日3時間していた）。

電話の中の自分の「アバター」は人気があり、誰よりも堂々としていた。けれど、当時知り合った異性の友人の誰とも、実際に会うことはなかった。嘘を白状してもいいと思えるほど気持ちが通じ合っていると感じていたときでも、会わなかった。わたしは「身体」を持つ人間として他者と対面することができなかった。

もちろん、わざわざ直接対面する必要があるのか、という反問もあるだろう。高齢者にも操作が簡単なインターフェースで、遠く離れた家族やヘルパーと画面越しに対面できるようにしてくれるロボットもある。社会的相互作用そのものを高めるには、こういうタイプのテクノロジーを積極的に導入するのが効果的かもしれない。

それでも、誰かと直接会う「対面 (face-to-face)」相互作用の価値を放棄してもいいのか、という点については、依然として疑問が残る。人間が完全にデジタル世界の「情

報パターン」に変換されない限り、身体（顔）を持つ他人と面と向かってコミュニケーションするときの経験を、デジタルインターフェースがそっくり再現することはできないからだ（うんと遠い未来には変わるかもしれないが）。同じ時空間で、ある存在と対面すること、哲学で現前（presence）ともいうこの「直接会うこと」の力は、舞台芸術を考えてみるとわかりやすい。YouTube でも「白鳥の湖」や「ジゼル」といったクラシックバレエのトップレベルのステージを鑑賞することはできるが、バレエファンはわざわざ大枚をはたいて「芸術の殿堂」まで観に行く。イギリスの国立劇場ロイヤル・ナショナル・シアターは NT Live というサービスを通して、世界レベルの公演を YouTube とは次元の違う画質、音響で提供している。これは韓国国立劇場の巨大スクリーンでも上映されるが、やはり役者の息遣いまで感じられる実際のステージにはとてもかなわない。わたしたちは誰かと一つの時空間を共有して初めてその人を、イメージや音としてだけでなく、立体的で多面的な存在として実感できるのだ。

わたしが自分の「アバター」を捨て、車椅子に乗った状態で誰かと直接会うのが平気になったのは、やむにやまれず世の中に出ていき、さまざまな場面で他人と会うようになってからだ。地下鉄で乗り合わせた乗客や、制服を着て学校で共に過ごした友人、スーパーの店員や買い物客には、時に戸惑い、しばしば不愉快にさせられたけれど、すぐに慣れた。物理的な世界で他人と会うことには多少の危険がつきものだ。他人というのはそもそも、各種ウイルスや細菌、偏見、異なる思想、同意しがたい理念の「運び屋」だ。新型コロナウイルスがもたらした状況がまざまざと示しているように、ソーシャルディスタンス（物理的な距離の確保）はわれわれの生物学的な安全を守ってくれる。けれど、よく知った居心地のいいコミュニティーから外の世界へと出ていくとき、オープンな相互作用の場へと踏み出すとき、わたしたちはその危険や不一致の中でしか得られない友情や歓待、愛、連帯と出会うことができる。政治思想家アイリス・ヤング（Iris Young）は、このように人と人との無数の（対面しての）出会いと別れの可能性を秘めた都市生活を「エロティック」だと表現した。そして、そうした都市生活の魅力を保ちながら安全で正義ある社会をつくるための核心的な価値として「差異」を挙げている。

カフェの店員と対面せずにスマートフォンでコーヒーの注文ができるモバイルオーダー機能が導入されると、聴覚障害のある友人は喜んだ。^{いざ}訝しげな目を向ける店員に「フラペチーノにシナモンをトッピングして……」と、たどたどしく説明しなくてもよくなったからだ。これは、友人にとっては本当にいいことだと思う。だが、すべてがこ

のモバイルオーダー式で動く社会になった場合、聴覚障害者が自分の声や手話で話し、非聴覚障害者がそれを聞く、というコミュニケーションはもう生まれなくなるのだと思うと、少し複雑な気持ちになる。そういう世界は常に「安全」ではあるだろうが、差異を尊重する必要はなくなり、差異が生み出す「継ぎ目」もなくなってしまうだろう。

障害者の人権運動家キム・ドヒョンは、障害者運動の目標とは「自立ではなく連立を、基本的な生の条件として目指すこと」であり、また自己決定権（自律性）とは「相互依存的な関係の中で、複数の主体が互いの意見や判断を共有、調整しながら実現すべき権利」であると強調する。わたしは、連立とは、今ここに生きている人たちの協力や連帯、連結にとどまらず、いつ登場するかわからない「他者」どもつながる生である、と言いたい。他者とは、わたしを手助けしてくれるヘルパーであり、盲導犬であり、車椅子であり、補聴器であり、友人、観客、読者たちだ。思いもしなかった世界やアイデンティティーへとわたしたちを導くこの「他者」たちは、揺るぎないと信じていた知識や技術、思想、政治的信念、知恵といったものの滑らかな秩序に、エラーとして登場する。介護コミュニティは、そうしたエラーを排除し、追いやり、完全に治療して無きものとするのではなく、エラーが生み出した継ぎ目から新たな探査を始める。他者を助け、他者として助け、他者を助けることを助けつつ、未来の他者の出現を歓迎する知識や技術とは、どんな顔をしているだろうか。

【出典】キム・ウォニョン「10章 つながって存在するサイボーグ」キム・チョヨプ、キム・ウォニョン『サイボーグになる——テクノロジーと障害、わたしたちの不完全さについて』（牧野美加訳）岩波書店、2022年、234～245頁

※設問の都合上、文章の一部を省略し、ルビを追加するなどの改変を加えた。